千葉医学　99：115－116，2023

〔編集後記〕

千葉医学99巻４号に関して記載させて頂きます。まずは，第15回（2023年度）千葉医学会賞・奨励賞の受賞者が決定いたしました。千葉医学会賞・基礎医学部門にはイノベーション再生医学・准教授の髙山直也先生からの前駆細胞リプログラミング技術を用いた高増殖型多系統不老化細胞の樹立と骨再生への応用に対して，また，千葉医学会賞・臨床研究部門には，アレルギー・膠原病内科／臨床研究開発推進センター（兼任）・特任講師の古田俊介先生からの，ANCA関連血管炎における新たな治療方法開発，に対して受賞となりました。いずれも千葉大学における現在の研究の最先端，そして，今後の益々の発展性を感じる素晴らしい内容です。今後とも，ご自身の研究の発展，更には，トップランナーとして後進の指導をお願い致したく思います。

千葉医学会奨励賞には，分子腫瘍学・特任助教の臼井源紀先生からの，大規模検診コホートを用いた，環境因子やエピゲノム異常と消化器病リスクとの関連の探索，循環器内科・医員の八島聡美先生からの，心臓CTを用いた左室心筋障害の新しい定量評価による予後予測法の確立，医学部６年・上野達矢氏からの，２つの制御性Ｔ細胞による生体恒常性維持機構，また，医学部４年・野口駿成氏からの膠芽腫幹細胞に対する治療戦略の再構築に対して受賞となりました。臼井先生，八島先生の研究内容は今後の大きな発展性を感じる論文であり，上野氏，野口氏は医学部学生であり，第16回ちばBCRCの最優秀賞も受賞しています。この熱き思いを今後も医師として，持ち続けて頂きたく，新たな予防法，治療を，見出してほしいと感じております。なお，受賞研究論文は，順次本誌に掲載予定となっております。

最終講義として，幡野雅彦先生，岩立康男先生にご執筆頂きました。私も共に拝聴させて頂きまして，当日の模様が詳細に描かれております。幡野雅彦先生の最終講義は，通例とは異なり，金曜日午前９時30分からという時間帯に行われました。普段はBasic Science Joint Meetingというクローズのミーティングが開催されている時間帯との事でした。疾患モデルマウスと歩んだ40年という題下に，得られた教訓，若手へのメッセージがご自身の体験から述べられております。特に，卒後10年が将来を決める（師との出会い）や語学の重要性，直感の重要性，緩・急，オン・オフを意識，など，大変勉強になりました。私個人も“自身の扉は他人が開いてくれる”と思っており，共感するところが多いです。また，幡野雅彦先生はちばBCRC開設時から全会，ご出席頂いており，改めまして感謝申し上げる次第でございます。

岩立康男先生には脳の原理という題下に，グリオーマに対する研究に始まり，様々な脳における現象のお話を頂き，ご執筆頂きました。神経細胞，アストロサイト，オリゴデンドロサイトなどの細胞の関係，腫瘍に対する免疫療法，脳老化には，一つ一つの細胞が代謝活動をして過程で，他の多くの細胞に影響を与え，また同時に他の細胞から影響を受けながら変化して行く動的な存在があること等，多岐にわたる内容でした。岩立康男先生には同じ時期に教授になった経緯もあり，医学部のデスクも隣り，そして同じ神経を扱うという事で長きにわたり神経の研究会で，ご指導頂きました。本当に有難うございました。

学会報告として，内分泌代謝・血液・老年内科学例会の43演題，千葉精神科集談会の28演題を掲載しました。症例報告から基礎研究，臨床研究など幅広く活動されており，益々の発展性が期待できると思います。

最後に，Chiba Medical JにCase Reportとして，西岡祐里先生らのCase of an obese, infertile Japanese woman with type 2 diabetes mellitus achieving a favorable and safe pregnancy outcome after laparoscopic sleeve gastrectomyの論文が掲載されました。一般的な手術や妊娠，出産に，肥満は多くの合併症の原因となります。しかしながら肥満対策に対して明確な指針がなく，保険診療加算もありません。肥満に対しての外科的手術の有用性を今回提示頂いております

が，この点に関して，日本肥満学会と日本肥満症治療学会が指針を提示したと認識しております。今後肥満が増加する本邦においても，あらゆる侵襲性のある治療前に肥満対策としての重要な選択肢の一つと考えております。

多くの素晴らしい研究の礎が“千葉医学”の伝統に宿っております。ただ必ずしも，これらが，対外的に十分にアピールできているかは，検討の余地があるかもしれません。来年，千葉大学医学部・同附属病院も創立150周年を迎えます。是非，“治療学”に根幹を置いたこれらの研究が，更に実りあるものになることを祈念しつつ，編集後記とさせて頂きます。

（編集委員　大鳥精司）